

1. はじめに

ケニアの教育制度は、8年間の初等教育(無料の義務教育) 4年間の中等教育 4年間の大学教育となっており、初等から中等へ、中等から大学へと進学するためにはそれぞれの卒業試験で良い成績を修めなければなりません。小学校の8年生と中等学校の4年生がいわゆる受験生ということになります。4月から1学期の始まる日本と違って、1月から1学期が始まるケニアでは、毎年9月から12月が卒業試験の準備・実施・採点・集計処理に大忙しのシーズンになります。(さらに翌年1~2月は入学準備のために教育省も学校も親たちもそれぞれの思惑のために、忙しく走り回ります。)

ここでは、中等学校の4年生が受験して、大学等への進学を目指す中等学校卒業資格試験Kenya Certificate Secondary Education (略称KCSE)に関するKenya National Examination Council発行の統計から、この国における受験の実態を読み取ってみようと思います。

中等学校卒業試験 受験者数の推移

年度	男子	女子	全体	男子割合
2001	104,911	89,972	194,883	53.83%
2000	97,956	84,010	181,966	53.83%
1999	93,487	79,396	172,883	54.08%
1998	91,502	76,896	168,398	54.34%
1997	85,741	70,973	156,714	54.71%

© 2002 The Kenya National Examinations Council

まず一つの表からは、次のようなことが言えそうです。

- 毎年5%程度の割合で卒業試験の受験者は増えている。
- 受験者は男子の方が10%程度多いが、その差は少しずつ小さくなっている。

2003年1月には初等義務教育における親の負担が少なくなったことから(新政府が公約を実行し、税金での負担分を増やしたため)、今後、より多くの子供達が中等学校へ、さらに大学へと進学しようとするでしょうから、卒業試験の結果に関する社会的な関心はこれからもずっと高まり続けていくでしょう。教育における男女差も、解消の方向にあると思われます。

2. 卒業試験の仕組み

さて、試験科目ですが、2001年度の場合、必修科目と選択科目をあわせて30を超える科目の中から受験生達は7つの科目を受験しました。科目選択の仕方はおおよそ以下のような決まりに従います。皆さんなら何を選びますか?下の表を参考にして考えてみてください。意外と、理数科の得意な生徒に有利な受験制度のような気がしませんか?

- 第1類の3科目(英語、スワヒリ語、数学)は全員が受験する必須科目。
- 第2類の理科3科目(物理、化学、生物)からは、必ず2科目を選択する。
- 第3類の社会系科目(歴史、地理、宗教等)から、必ず1科目を選択する。
- 7つ目の科目は、残る全ての科目の中から1つを自由に選択できる。

2001年度 卒業試験の主要科目成績

類	科目	女子		男子	
		出席者	平均点	出席者	平均点
1	英語	89,484	34.7	104,339	34.4
1	スワヒリ語	89,486	44.7	104,339	43.3
1	数学	89,481	15.8	104,334	21.2
2	生物	85,499	29.5	91,525	34.5
2	物理	16,225	22.2	38,425	26.8
2	化学	84,534	29.4	96,862	23.4
3	歴史・政府	34,989	47.9	46,961	53.1
3	地理	48,116	31.6	61,354	37.3
3	キリスト教	38,339	49.2	26,961	49.4
3	社会教育	23,618	53.0	25,725	55.9
4	家庭科学	10,365	58.3	526	51.7
4	農業	44,309	45.5	53,181	48.7
5	商業	43,441	36.6	50,553	39.5

© 2002 The Kenya National Examinations Council

3. ケニア人生徒の得意・不得意

上の表は2001年の10月から11月にかけて実施された卒業試験で、選択した生徒の多かった科目の平均点とその受験者数を男女別に比較したものです。

科目毎に平均点をざっと見渡しても、スワヒリ語や歴史、キリスト教のような社会系科目に比べ、理数系科目の成績がかなり劣っていることがわかってきます。

特に数学の成績は酷いものです。数学より少しましなレベルで物理と化学が続き、理数教科の中では最も良い生物の成績でも30%前後です。その傾向は毎年ほとんど変わりません。

男女別に各科目の成績を比較してみると、表中には赤字で成績のより良い科目の点数を強調しましたが、全般的に男子の方が良い成績を修めているようです。受験者数でも男子の方が多くこととあわせ、やはり社会全体として、女子の教育に関する関心の低さが有形無形のプレッシャーとしてこうした数字に現れるのでしょう。

興味深いのは理数科目の選択の仕方です。生物、化学、物理の2科目から最低2科目を受験することになるわけですが、必修科目の数学の出席者と比較してわかるように、大多数の子供は男女を問わず生物と化学を選んでおり、物理を選択するのは男子でも3人に1人程度、女子に至っては5人に1人以下なのです。それほど物理への苦手意識は強いのでしょうか。逆に考えれば、物理を得意と思っている子供だけ受験してもこの程度の成績なのですから、もし必修科目として数学同様全員が受験すれば、数学と同様の悲惨な数字が出てくるかもしれません。

とすると、単純に平均点を比較すれば化学と同レベルに見える物理の成績は、むしろ数学のそれに近いと考えて良いでしょう。そして、こうした状況が、さらに中等学校(校長)側に物理教育を避ける(実験器具や施設にお金ばかりかかって、物理を教えられる先生も少なく、卒業試験では点数が取れない)風潮を生みだし、物理を勉強することのできる生徒数が減り、受験者数もさらに減る…というような悪循環があるのかもしれない。

4. おわりに - SMASSEが目指すもの -

ということで、やはりSMASSEプロジェクトとしては、教員研修の機会をフル活用して、ケニアのあらゆる中等学校の教室に楽しくて分かり易い理数科授業を強力に普及していくことを目指すのみです。その結果、特に数学と物理に対する生徒達の苦手意識、先生達の苦手意識、校長の苦手意識、そして彼らを取り巻く社会全体の苦手意識が少しずつ取り除かれ、数学が好きな生徒が増え、物理が得意な先生が増え、数学や物理の成績がせめて生物のレベルにまで追いつくことを最初の目標にしたいと思います。

また、何となく女子への教育が軽視されている社会通念も、女子生徒自身が勉強を楽しみ出すに連れ、そして世代が交代するに連れ、変わっていくことでしょう。2002年度の初等教育卒業試験の成績トップは女子でした。当たり前ですが、ケニアの女子生徒・児童にも等しく学力は備わっているのです。

どんなお店に行ってもお金を扱うのはヨーロッパ系やインド系の人達ばかりで、ケニア人は下働き人として低賃金で雇われているだけ…という現在の状況(いわゆるサブサハラアフリカ諸国はいずれも同様でしょう)から、少しずつ脱皮を重ねてケニア人自らがケニアの物流や金融をコントロールし得るような、もう少しケニア社会全体の富がケニア人全体に等しく分配されるような、そんな社会へ成長・成熟していくためには、まずケニアの富の流れを国民全体が何となくでも数字として認識し、その偏在ぶりや富める者へと集中するばかりの所得再分配の仕組みを彼らが自ら自身の問題点として認識しなければなりません。そのためには数学や理科の教育を通して培う計算能力や数値評価能力、合理的な思考に基づく判断・行動能力が必要なのだと思います。

SMASSEプロジェクトのような理数科教育への支援というのは、発展途上国の人達が、自らの手で、自らの意志で、自らのために国を作っていくための人材育成支援なのです。そのための、息の長い日本からの支援を彼らは望んでいます。私としては、プロジェクトの一員として、ケニアの期待に、アフリカの期待に、彼ら自身の声に、出来るだけ応えていきたいと思うのですが、皆さんは如何お感じになりますか。